

第1回松本城・城下町写真エッセーコンテスト

最優秀賞 「松本城ありがとう」 藤本 豊三



「松本城ありがとう」

藤本豊三

松本城での祭礼に、二十六夜祭というのがある。事の起ころは、元和四年（一六一八年）正月二十六日夜のことに始まる。

宿直の侍が疲れたのか、まどろみはじめた時、夢、幻か、美しい女人が現れた。「この錦の袋を御神体とし、毎月二十六夜に米三石三斗三升三合を炊き、二十六夜神に奉げよ」と錦の袋を侍の手中に残して消えていった。

時の城主戸田康長は、残された錦の袋を不思議に思い、天守閣の屋根裏に二十六夜神を祀り、城の安泰を祈願したのが祭祀の由来だそうだ。

享保十二年（一七二七年）の災害があった時、城が消失から守られたのは、二十六夜神のお蔭であると云われている。

北アルプスの景色に溶け込んだ国宝天守閣は見映えが良い。青空に響える城の勇姿は涼々しく美しい。この素晴らしい景観は、国内の各地の城と比べても遜色ないものだろう。

明治の廃藩置県以後、城の保存に情熱を注いだ昔日の人々がいる。その多大な尽力と苦労、その愛念を、市民は忘れてはいない。この愛念ゆえ、市民は松本城を愛するにいたっているのだと思う。

時の流れの中、風雪に耐えた城。「松本城いい景色だ。元気出てきたよ」「勇気が出たぞー」「インスピレーションが湧いてきたー」訪れた人は笑顔になった。そして今日もお城に感謝したい。松本城ありがとう。